

Title	カザフ語の使役文
Author(s)	藤家, 洋昭
Citation	大阪外国語大学論集. 19 p.17-p.32
Issue Date	1998-09-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79766">https://hdl.handle.net/11094/79766</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## カザフ語の使役文

藤 家 洋 昭

### Қазақ тілінің өзгелік сөйлемі

ФҰЖПЕ Хироаки

Қазақ тілінің өзгелік етіс жөніндегі зерттеулегі зерттеулердің көбі, өзгелік етісті морфологиялық жағынан зерттеулер болып, синтаксис жағындағы зерттеулер өте аз кездеседі.

Бұл мақалада Қазақ тілінің өзгелік сөйлеміне, синтаксис жағынан зерттеу жүргізіліп, алдымен өзгелік сөйлемнің құрлымы белгіленді. Осының нәтижесінде, өзгелік етісіндегі «ГІЗ» журнағының, сөйлемде дербес түрде негізгі бөлектік (бас бөлектік) роль ойнайтындығы анықталды. Сонымен бірге «Сөз тіркесі құрлым грамматикасы теориясына» негізделе отырып «ГІЗ» журнағына грамматика жағынан талдау жасалды.

#### 1. はじめに

使役文についてはこれまで数多くの研究がなされてきた。例えば日本語の使役文についても1960年代から現在にいたるまで多くの成果があげられている。<sup>1)</sup> またトルコ語の使役文に関する研究もある。一方カザフ語については、使役についての記述は全くないというわけではないが、多くの場合、使役を使役形という形態の範囲で記述しただけで終わっていた。つまり形態論として扱われることが多く、使役を使役文として統語論的に分析することはあまりされてこなかったのである。そのためカザフ語の使役文は、その統語構造をはじめ、明らかにされていない点が多いと考えられる。

本稿ではこれらのことを踏まえ、カザフ語の使役を使役文という観点から分析することを試みる。はじめにカザフ語の使役文を概観して使役を表す手段、使役文の語順、使役文における格を観察してカザフ語使役文の基本的なデータを示す。その次に、それらのデータをもとにカザフ語使役文の構造を句構造文法の枠組みを用いて記述する。その結果これまでの形態論的な分析では明確にならなかった事実が明らかになる。最後に使役形態素“ГІЗ”に辞書記述を与えるを試みる。

## 2. 基本データ

本章ではカザフ語の使役文を概観して基本的なデータを提供する。データは主としてカザフ人インフォーマントから収集した。一部文献から引用したものもあるがそれらは出典を記しておいた。文法性のチェックは複数のインフォーマントにより行なった。<sup>2)</sup>

### 2. 1 使役形

使役を表す手段は言語によってさまざまである。使役動詞を用いる言語、動詞を使役形にする言語がある。また、そもそも使役を表す手段が文法的にはっきりしていない言語もあるかもしれない。

カザフ語の場合は（少なくとも表面的には）動詞の使役形によって使役を表す。動詞の使役形は動詞語幹に使役形態素をつけることによって作られる。この形成は生産的に行われ、動詞語幹にГІЗ（とその母音調和と子音同化による異形態ҒЫЗ～ҚЫЗ～КІЗ）を付けることによって表される。

例  
күл-「笑う」 күл-гіз-「笑わせる」, кір-「はいる」 кір-гіз-「はいらせる」, бар-「行く」 бар-ғыз-「行かせる」, айт-「言う」 айт-қыз-「言わせる」

ГІЗは拘束形式であり、常に語幹に付けられて用いられ、自由形式として単独で現れることはない。時制や人称を表す要素はГІЗの後に来る。また、使役を表す形式としてはГІЗ以外にДІРも用いられる。<sup>3)</sup>

さらに動詞によってはEPやTをとるものもある。これらの分布はこれまでも関心がもたれ、かなり以前から記述されており、今日ではおおよそのことが明らかになっている（Қазақ тілінің грамматикасы（以下ҚТГと記す）、Geng (1989)。<sup>4)</sup> 未解決の問題がないわけではないが、使役形態素の分布を記述することが本稿の目的ではない。<sup>5)</sup> 重要なことはカザフ語では動詞がどの使役形態素をとるにしろ、何が使役を表すかがはっきりしていることである。つまりどのような場合でも容易に使役形態素を取り出すことができるのである。

以下本稿ではГІЗ, ДІР, Т... とあるカザフ語の使役形態をГІЗで代表させることにする。

### 2. 2 他動詞文と使役動詞文

日本語では対応する自動詞がある他動詞と動詞の使役形は別のものとして扱われることが多いようである。<sup>6)</sup> その理由のひとつとして形態の違いがあげられる。例えば、

自動詞	他動詞	使役
oriru	orosu	orisaseru
tooru	toosu	tooraseru
tatu	tateru	tatesaseru

のように、もともになると考えられる自動詞に対して他動詞と使役形が別の形で存在している。ま

た、日本語では一般に使役形は生産的に作られるのに対して他動詞はそうではない、という違いもある(柴谷1984)。意味の問題を別にしてもこのような違いがある。文型という点でみると、使役文は一見他動詞文のようなところもあるが、「に」をとることができる場合があるという点で違いもある。<sup>7)</sup>

それではカザフ語ではどうなのだろうか。自動詞の使役形と他動詞はどのように違っているのだろうか。

まず、形態の点から分析し、次に文型を検討する。

## 2. 2. 1 形態

使役形がГІЗによって作られることは2. 1 でみた。それでは自動詞の他動詞化がどのようにして行われるのだろうか。これまでの記述によればやはりГІЗによって形成される(Қазіргі қазақ тілі (以下ҚКТと記す), Geng (1989))。しかし、これらの記述に例としてあげられているものを見ると, жүгірт-, күлдір-, などがあり, このなかでкүлдірは同書(ҚКТ)では使役形の例としてもあげられていて, その区別についての説明はない。このように自動詞が他動詞化したものと使役化したものが区別できない, あるいは区別が難しいことは事実であるようである。

上で見るかぎり, カザフ語では自動詞を他動詞化したものと使役化したものとの間には形の上で日本語で見られるような違いはない。

## 2. 2. 2 他動詞文と自動詞使役文

ここでは他動詞文と自動詞使役文の文型を観察する。

他動詞文と自動詞使役文は表面上同じような形をしている。前節でも述べたように自動詞の使役形が何かを指摘することは難しい。ここではこれまで「使役文」とされてきたもの, より正確には「使役形の動詞」の用例」を使役文と考えそれらと本来の他動詞を用いた例を比べる。

まず使役文の用例を見よう。

Мұғалім балаларды отырғызды. (Geng and Li (1985))

先生・子どもたち(対格)・座らせた

「先生が子どもたちを座らせた。」

これらからわかることは使役主-被使役者-動詞の語順で, 被使役者が対格で示されていることである。文全体としてみると, 主語-対格目的語-動詞である。

次に他動詞文の例を見る。

Мұғалім балаларды көрді. (他動詞文)

先生・子どもたち(対格)・見た

「先生が子どもたちを見た。」

他動詞文も, 主語-対格目的語-動詞という構成になっている。すなわち使役文と同じ構成である。

以上見たように, カザフ語の使役文は他動詞文と同じ文型をとる。

## 2. 3 使役文における格

使役文においてそれぞれの要素がどのような格で表されるかは興味深い問題であり、言語によってさまざまである。主文の主語は主格をとるにしても問題なのは被使役者である。例えばチュルク系の言語のとなりで話されている、ウラル系の言語では被使役者の格が言語によって位置格(所格, 具格), 着点格(与格, 向格), 受動者格(対格)の3種になるという(小泉1994)。<sup>8)</sup> また、日本語においては「に」で表されたり、「を」で表されたりすることがあり、それらの違いなどについて以前から研究されてきた。すでに前節で見たように、カザフ語の使役文では自動詞の使役文の場合は他動詞文と似た構成になり、格は対格が用いられる。本節ではそれ以外の場合、すなわち他動詞の使役文を含めてカザフ語の使役文がどのような格をとるか観察する。

カザフ語の使役文は語順などの面では日本語の使役文に似ているところがある。<sup>9)</sup> 使役主ー被使役者ー目的語ー動詞の順で並ぶのがもっとも基本的な語順であると考えられる。格の表示方法は格語尾と呼ばれるものによって表される。<sup>10)</sup>

日本語などには使役文に二つのタイプがあることを確認しておこう。変形文法の分析によれば自動詞文を補文にもつものと、他動詞文を補文に持つものである(井上1976)。別の言い方をすると、自動詞が使役形になったものからなる使役文と他動詞が使役形になったものからなる使役文である。文型の点からは前者は目的語を一つとる他動詞文、後者は目的語を二つとる他動詞文に近いものになる。この区別はカザフ語にもそのままある。すなわち自動詞も他動詞も使役形になることができる。自動詞の使役文については前節で指摘したとおり定義が難しいのであるがここでは伝統的な考えにしたがう。<sup>11)</sup> 以下、それぞれの動詞の使役文における格を検証する。

### 2. 2. 1 自動詞がもとになった文

自動詞が使役形になった例としてつぎのようなものがある。

барғыз — 「行かせる」, келгіз — 「来させる」, күлдір — 「笑わせる」, отырғыз — 「座らせる」, тұрғыз — 「いさせる, 立たせる」

これらが用いられた文として次のデータがあげられる。

Нұрбек Сайраны Шымкентке барғызды.

ヌルベク(人名)・サイラ(人名)(対格)・チムケントへ(地名)・行かせた

「ヌルベクはサイラをチムケントへ行かせた。」

Мұғалім балаларды отырғызды. (Geng and Li (1985))

先生・子どもたち(対格)・座らせた

「先生は子どもたちを座らせた。」

Нұрбек Сайраны күлдірді.

ヌルベク・サイラ(対格)・笑わせた

「ヌルベクはサイラを笑わせた。」

このデータから被使役者は対格で表されるということが出来る。

ところで日本語では「を」の他に「に」でも表されることは先には触れたがカザフ語では被使役者を与格で表すことはできるのだろうか。

\* Нұрбек Сайраға Шымкентке бардырды.

ヌルベク・サイラ (与格)・チムケントへ・行かせた

\* Мұғалім балаларға отырғызды.

先生・子どもたち (与格)・座らせた

\* Нұрбек Сайраға күлдірді.

ヌルベク・サイラ (与格)・笑わせた

カザフ語では被使役者を与格で表すことはできない。

## 2. 2. 2 他動詞

他動詞が使役形になったものとして, бергіз—「与えさせる」, жаздыр—「書かせる」, оқыт—「読ませる」, жуғыз—「洗わせる」などがあげられる。これらが用いられた例として次のデータがある。

Нұрбек Сайраға хат жазғызды.

ヌルベク・サイラ (与格)・手紙・書かせた

「ヌルベクはサイラに手紙を書かせた」

Мұғалім балаларға кітап оқытты.

先生・子どもたち (与格)・本・読ませた

「先生は子どもたちに本を読ませた。」

Нұрбек Аманболға кірлерді жуғызды.

ヌルベク・アマンボル (人名) (与格)・汚れを・洗わせた

ヌルベクはアマンボルに汚れ物を洗わせた。

上のデータでは被使役者 (Сайраға, балаларға, Аманболға) は与格になっている。これらが対格をとることができるかどうか確かめておこう。

\* Нұрбек Сайраны хат жаздырды.

ヌルベク・サイラ・手紙 (対格)・書かせた

\* Мұғалім балаларды кітап оқытты.

先生・子どもたち (与格)・本・読ませた

\* Нұрбек Аманболға кірлерді жуғызды.

ヌルベク・アマンボル (与格)・汚れ・洗わせた

これらはすべて非文になるため対格は使えないと考えていい。つまり他動詞が使役形になったものでは被使役者は与格で表される。

ここまでのところをまとめると被使役者を表すのに、自動詞の使役文のときは対格が、他動詞の使役文の場合は与格が用いられるということができる。<sup>12)</sup>

### 3. 構造と辞書記述

本章では2章で観察したデータをもとに句構造文法の枠組みを用いて分析を行う。そして使役形態に辞書記述を与える。

まずはじめにカザフ語の使役文の構文がどのようになっているかということを考察する。その結果使役形の動詞は形態的にはひとつであるが句構造の上ではFI3が分離して単独で主辞 (head) として働くということを指摘する。そしてそれをもとにFI3に辞書記述を与える。

句構造文法と一口に言っても様々なバリエーションがある。本稿ではそのなかでも主辞駆動タイプの句構造文法をもとに分析を行なう。Gazder et al (1985) に見られるような超規則 (metarule) は採用していない。超規則などを用いる代わりに文法情報の多くを辞書に記述する。

#### 基本的な考え方

本稿で採用している句構造文法の考え方に範疇の素性の集合によって表すということがある。例えばNP, VPは素性の集合によって次のように定義される。このなかでは HEAD は主辞素性, POS はいわゆる品詞, SUBCAT は下位範疇化素性を表す, nil はゼロを表す。

- a. NP = HEAD [POS N] SUBCAT <nil>
- b. VP = HEAD [POS V] SUBCAT <NP>
- c. VP = HEAD [POS V] SUBCAT <NP, NP>
- d. VP = HEAD [POS V] SUBCAT <NP, NP, NP>

上でb. とc. とd. はいずれもVPであるがこれらの違いは下位範疇化素性の違いである。別の言い方をすればこれらの違いは結合価の違いで、それぞれ自動詞、目的語を一つとする他動詞、目的語を二つとする他動詞を表している。文が何の投射 (projection) であるかは議論のあるところだが、本稿では動詞の投射であるとする立場をとる。したがって文はつぎのように定義さる。

S = HEAD [POS V] SUBCAT <nil>

上のc. とd. はSUBCATの値としてNPが並んでいる。Pollard and Sag (1994) (以下 Pollard and Sag (1994) をHPSGと記す。) ではSUBCATの要素は斜格性の低い順に左から並ぶリストであるとしているが、本稿ではGunji (1987) (以下 Gunji (1987) をJPSGと記す) にならって文法関係を記したものの集合とする。b. c. d. は文法関係を表す素性GRを加えて下のように補正される。

- b. VP = HEAD [POS V] SUBCAT <NP [GR SBJ] >
- c. VP = HEAD [POS V] SUBCAT <NP [GR SBJ], NP [GR OBJ] >
- d. VP = HEAD [POS V] SUBCAT <NP [SBJ], NP [OBJ], NP [OBJ] >

素性としてはこのほかに意味素性 SEM も用いる。句構造文法で考えられている主辞素性原理 (Head Feature principle), 以下範疇化素性原理 (subject Feature principle) はそのまま採用する。

なお、すべての素性を常に記すことは紙面の都合などもあり現実的ではないので以下ではさまざまに簡略した表記をする。例えば、

SYN [ HEAD [POS V]  
 GR nil  
 SUBCAT <SYN HEAD [POS N]  
 GR SUBJ>

SEM...

を, 場合によっては

VP [SUBCAT<NP>]

あるいは, 単に

VP

などと記すことがある.

### 3. 1 使役文の構造

先にも述べたように, カザフ語の使役文には, 大きくわけて, 自動詞が使役形になっているものと, 他動詞が使役形になっているものの二つのタイプがある. それぞれについて構造を調べる.

#### 1. 他動詞が使役形になっているもの

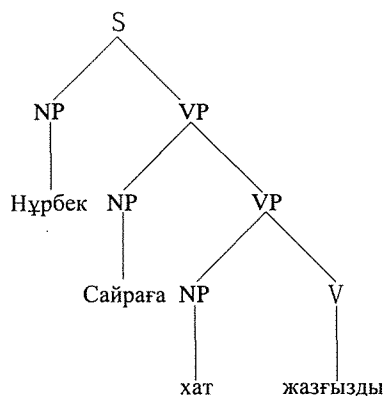
他動詞が使役形になっている使役文として次の例をもとに構造を検討してみよう.

Нұрбек Сайраға хат жазғызды.

「ヌルベクはサイラに手紙を書かせた。」

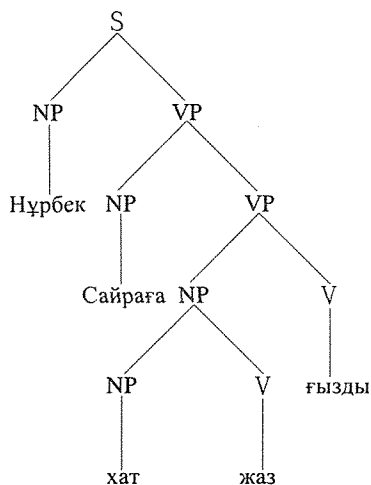
考えられる可能な構造として主なものには次のようなものがある.

(1)

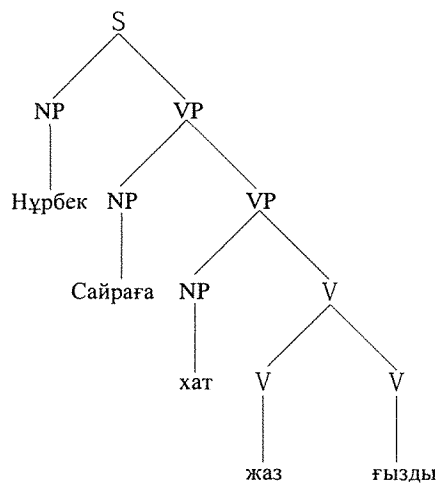




(2)



(1')



カザフ語の動詞の形態的特徴を考えると(1)がもっとも自然であると思われる。(2)は日本語の使役文で提案されている構造である。

これらの構造のうち、どれがもっとも適当であるか柴谷(1978), 郡司(1994)における日本語の使役文の分析をもとに以下に検討する。

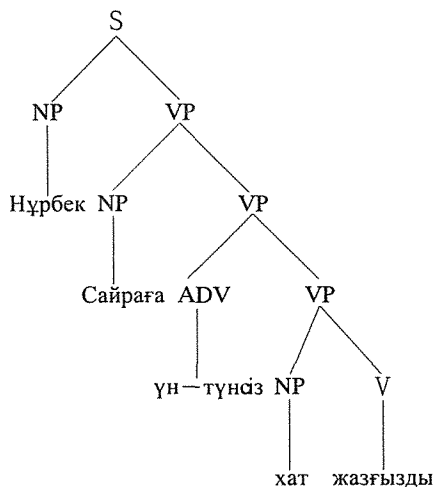
まず副詞がどのようにかかるかという点を見よう。

Нұрбек Сайраға үн-түңсіз хат жазғызды.

「ヌルベクはサイラにだまって手紙を書かせた。」

この文は二義文であり, 副詞үн-түңсізがНұрбекの動作を修飾する解釈とСайраの動作を修飾する解釈が得られる。

（1）の構造に， $\gamma\eta-\tau\upsilon\eta\varsigma\iota\varsigma$ を付加するとしたら次のようになろう．

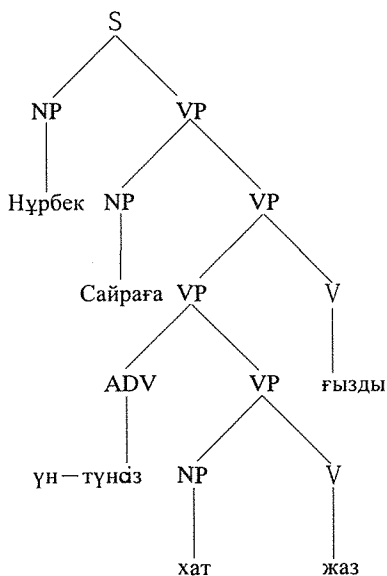


しかしこの構造では〔 $\gamma\eta-\tau\upsilon\eta\varsigma\iota\varsigma$  хат жазғыз〕という部分はあるが，〔 $\gamma\eta-\tau\upsilon\eta\varsigma\iota\varsigma$  хат жаз〕という部分をきりはなすことができないため，Сайра  $\gamma\eta-\tau\upsilon\eta\varsigma\iota\varsigma$  хат жазという解釈を説明するのに無理がある．したがって（1）の構造は適当ではない．

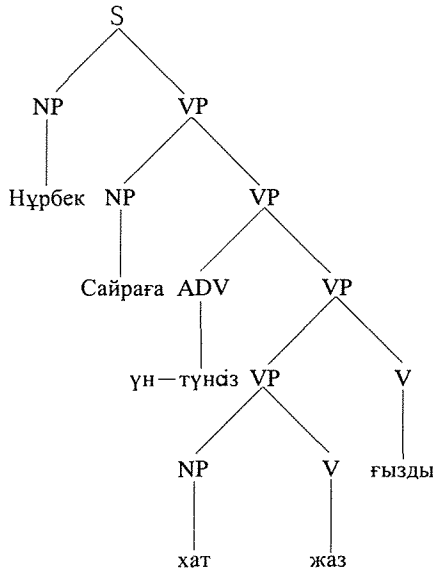
それでは（1）の修正としてжазとғызを切り離した（1'）を検討してみよう．

これはただжазとғызを切り離しただけであり，それらは同一節点に支配されているのでやはり Сайра  $\gamma\eta-\tau\upsilon\eta\varsigma\iota\varsigma$  хат жазを説明するのには無理がある．

次に（2）をみてみよう．（2）に $\gamma\eta-\tau\upsilon\eta\varsigma\iota\varsigma$ を付加すると次のようになろう．



この構造ではСайра үн-түніз хат жазの解釈が得られる。次に(2)にүн-түнізを付加する別の可能性として次のような付加のしかたがある。



この場合үн-түніз [хат жазғыз] の解釈を得ることができる。

次に、もとの使役文と同じ内容を表している、次のような文を検討してみよう。

Нұрбектің қылғаны Сайраға хат жазғызу болды.

「ヌルбекがしたことはサイラに手紙を書かせることだった。」

Нұрбектің қылғызғаны Сайраның хат жазуы болды.

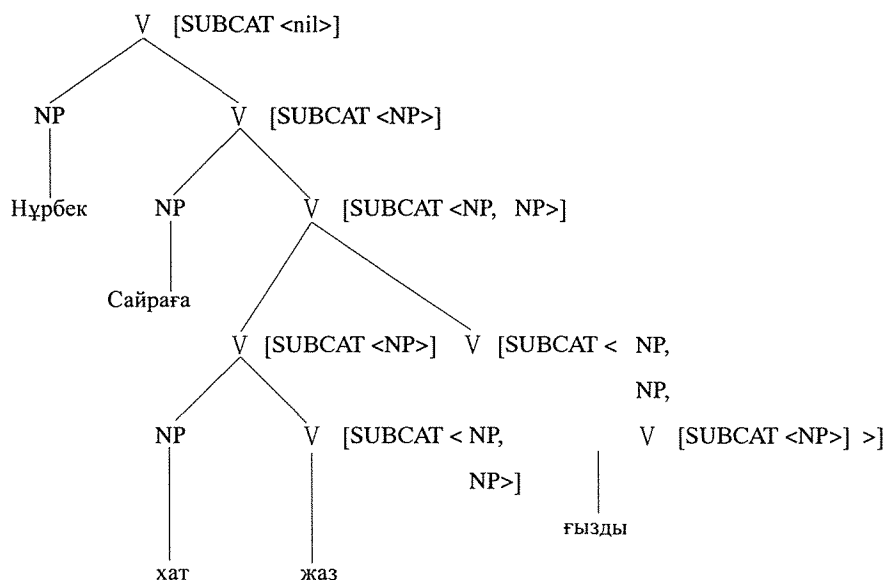
「ヌルбекがさせたことはサイラが手紙を書くことだった。」

これらが成り立つためには[хат жаз]という構成素があることが必要であるが、(1)や(1')には[хат жаз]という構成素が存在しないため構造として不適當である。

以上のようなことから(2)の構造が適當であることが明らかになった。

## 2. 自動詞が使役形になっているもの

自動詞の使役文についても基本的に他動詞使役文と同じような構造をもっていると考えることができる。ただ、インフォーマントによっては[Нұрбек шық]のように、副詞が被使役者の動作にかかる解釈が得られないこともある。そういう場合は意味的にもГІЗを切り離すことができないことになるが、そうするとそうははたして使役文なのかという疑問がわいてくる。つまり2章で問題になった自動詞の他動詞化との区別ということが問題となってくる。上で記した構造は簡略表記によるものだったがここで下位範疇化素性値を入れて記しておく。



以上がカザフ語使役文の構造である。<sup>13)</sup> カザフ語では一般的に主辞は右側に来るので、この構造ではFI3が主辞として働くことがわかる。それでは次にFI3の辞書記述に移る。

### 3. 2 FI3の辞書記述

カザフ語の使役文は前節で示すような形になるわけであるが、なぜそのような構造になるかを保証しなければならない。古典的な考え方では句構造は句構造規則によって生成される。一方、本稿がとっている立場である主辞駆動型の句構造文法では、句構造は辞書における語の記述によって文法性が保証されるとする (Pollard and Sag (1987))。したがってFI3の辞書記述を行い構造の文法性を保証しなければならない。<sup>14)</sup>

以下本節では、使役文において主辞として働くFI3に辞書記述を与える。

まず主辞素性 POS から検討すると、FI3は動詞句の主辞として働いているので POS を V とする。次に何を以下範疇化しているか見よう。

前節の最後に示した構造図を見られたい。この図からFI3が下位範疇化するものに、хат жазからなる V P, Сайрағаで示されている目的語 NP, そして主語の NP (Нұрбек) があることがわかる。それらをここに記すとFI3 [SUBCAT <NP [SUBJ], NP [OBJ], VP>] のようになる。

ここまでのところをまとめると次のようになる。

PHON	гiз				
SYN	<table> <tr> <td>HEAD</td><td>[POS V]</td></tr> <tr> <td>SUBCAT</td><td>&lt;NP [SUBJ], NP [OBJ], VP&gt;</td></tr> </table>	HEAD	[POS V]	SUBCAT	<NP [SUBJ], NP [OBJ], VP>
HEAD	[POS V]				
SUBCAT	<NP [SUBJ], NP [OBJ], VP>				

これでとりあえず使役文の構造はこの記述から生成（保証）できる．次に意味の問題を考えてみよう．先の例におけるVPの主語を考えると，Сайпаという解釈が少なくとも意味の上からは得られる．Сайпаは主文の目的語であり与格名詞である．これをどのように説明するかという問題がある．変形文法などでは複数の構造を設定すると思われるが，句構造文法ではこれを意味素性を用いて記述する．

使役文の意味は，ごく簡単には，文全体の目的語が動作の意味上の主語であり，その動作を使役主が働きかける，ということになると思われる．これを（Pollard and Sag（1987））の記法をもとに次のように表す．

使役文

SEM	RELN CAUSE
CAUSER	文（全体）の主語
CAUSER	文（全体）の目的語

文全体の意味が上のようになるのは，主辞素性の原理（Head Feature Principle）により主辞の辞書に記述されているからだと考える．本稿の立場では使役文の主辞はFI3であるから，FI3に意味表示に合うように記述を与えなければならない．

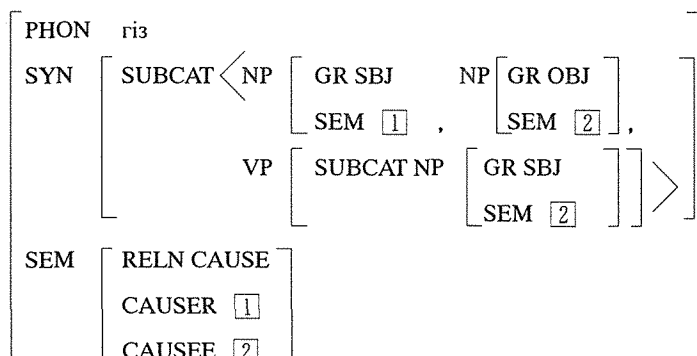
まず CAUSER の値を考えると CAUSER の値は全体の主語であるが，文全体の主語は SYN の SUBCAT の値にある NP [SBJ] のことである．これらが意味的に同じものを指していることを示すために同じ番号をふる．ここでは [1] としておく．同じように，CAUSER と文全体の目的語が意味的に同じであることを示すために同じ番号をふる．主語とは区別するために [2] としておく．ここまですとまとめると次のようになる．（紙面の節約のために，POS 等の素性を省略する．）

FI3

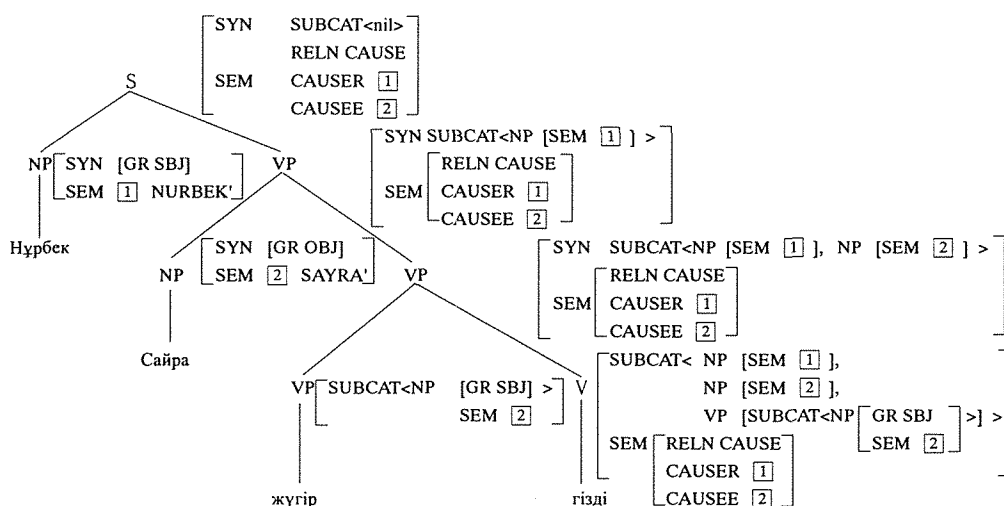
SYN CUBCAT	<NP SBJ [SEM [1]] , NP OBJ [SEM [2]] , VP>
SEM	RELN CAUSE
CAUSER	[1]
CAUSER	[2]

次に文全体の目的語が意味上の主語であることを示す必要がある．FI3が下位範疇化するものの中にVPがあるが，このVPが下位範疇化するNPがこのVPの主語である．このNPは統語的には主語NPとしては存在していない．意味的には文全体の目的語を指すので意味素性として [2] をふる．これらをまとめると次のようになる．

ГІЗ



これで大まかではあるがГІЗの辞書記述ができた。実際の文 “Нұрбек Сайраны жүгіргізді。” に即して見てみよう。Нұрбек, Сайраの固有名詞の意味表示は NURBEK', SAYRA' とした。



これで主文の主語は使役主、主文の目的語は目的語であると同時に意味上の主語であることが記述できた。

ところで、2.1で述べたようにカザフ語のPI3は拘束形式であるという事実がある。また、2.3で見たように被使役者が与格で表される場合と対格で表される場合がある。したがってこれらを辞書に記述しておかないと、次のような非文が文法的に認可されてしまうことになる。

- а. \*Нұрбек Сайраға хат ғыз жазды.  
б. \*Нұрбек Сайраны хат жазғызды.

このことを防ぐために辞書記述に修正を加える。

まず, a. の文が認可されないようにするために,  $\Gamma 13$  は常に動詞に後続して現れるという記述を補語となる要素が直前に来なければならないことを示す素性 ADJACENT を導入して行なう. 具体的には  $\Gamma 13$  の下位範疇化素性が次のように修正される.

SUBCAT <NP, NP>

ADJACENT <VP>

次に, b. の文の認可を防ぐためには自動詞用と他動詞用の 2 種類の  $\Gamma 13$  を用意することで対処したいと思う.

$\Gamma 13$  自動詞用

SUBCAT <NP [SBJ, NOM], NP [OBJ, ACC] >

ADJACENT <VP>

$\Gamma 13$  他動詞用

SUBCAT <NP [SBJ, NOM], NP [OBJ, DAT] >

ADJACENT <VP>

このような修正により, a. や b. の認可は回避できる.

#### 4. おわりに

以上本稿ではカザフ語の使役文の構造を記述し,  $\Gamma 13$  に辞書記述を与えた.

また, カザフ語の使役形の動詞は形としては一語であると言ったことができるかもしれないが, 統語的には  $\Gamma 13$  が独立して主辞として働くということを指摘した. さらに  $\Gamma 13$  の辞書記述により使役文における意味上の主語の扱いを記述した.

カザフ語の使役について本稿で触れることのできなかった問題, 残された課題は多い. それらを列挙すると,

自動詞の他動詞化と使役化の問題

使役文の目的語の制限

二重使役文

...

などがある. また,  $\Gamma 13$  の辞書記述が自動詞用と他動詞用の二つにわかれてしまい, 統一的な記述が与えられていない. これらの問題は今後の課題とし, 解決していきたい.

#### 注

1) 1970 年代の研究に井上 (1976), Shibatani (1976) などがある.

2) インフォーマンとして協力してくださったのは B. Д. К. 氏と B. С. 氏 (共に三十代男性) の二人である. この場を借りて二人のインフォーマントに心から感謝申し上げる.)

3) トルコ語では DIR が一般的である.)

4) これらの分布は基本的には音韻的に規定される. しかし音韻だけでは解決しきれない点があるのは事実

- であり、未解決の問題も残っている。)
- 5) Geng (1989) に要領よくまとめられている。)
- 6) 井上 (1976) など。ただし、井上 (1976) は同時に両者の共通点を指摘している。)
- 7) 厳密にいうと「を」をとるものと他動詞は完全に一対一で対応するわけではない。)
- 8) カザフ語では位格が位置格に、与格が着点格に、対格に受動者格にそれぞれはいる。)
- 9) 使役文に限らず両者の基本語順はほぼ同じである。)
- 10) 語尾ではなく助詞とする考え方もある。)
- 11) つまり自動詞の他動詞形との混同があるかもしれない。)
- 12) 被使役者がそれ以外の格をとる可能性について若干の考察を加えておく。KTGは、

Ол оқудағы ағасынан жақа кітап алдырып тұрады.

彼・学んでいる・兄-彼の(奪格)・新しい・本・買わせて(使役形)・いる

「彼は学生の兄を通じて新しい本を買っている。」

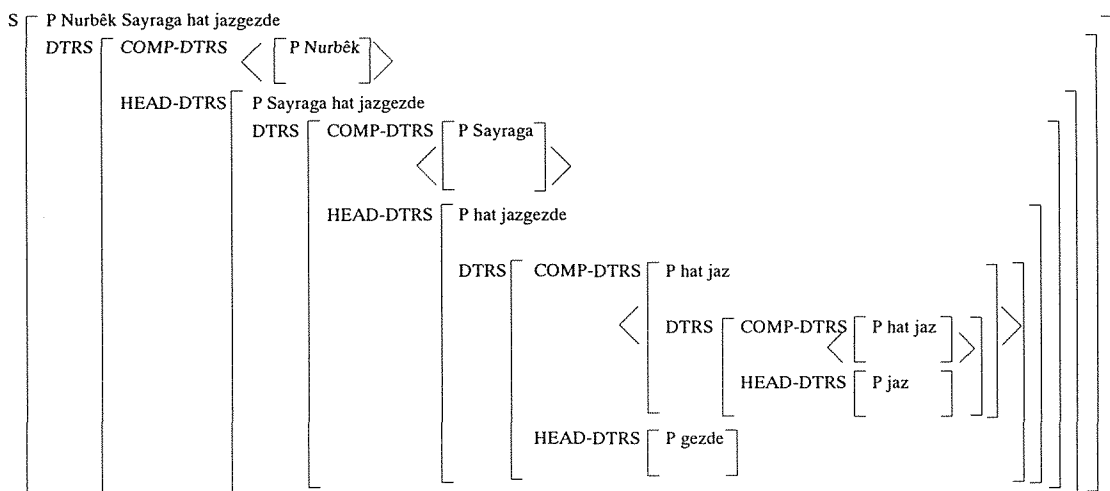
という文を例にあげ、被使役者が奪格で示されていることあるとしている。確かに、この文における *ағасы* 「彼の兄」は奪格で示されている。しかしこれは本当に被使役者なのだろうか。普通の使役文では、意味的にみると、使役助詞(の使役を除いた部分)の意味上の主語は被使役者であるとする解釈がある。例えば次の文で手紙を書いたのはサイラであってヌルベクではない。

Нұрбек Сайраға хат жаздырды.

「ヌルベクはサイラに手紙を書かせた。」

ところが問題の文では本を買ったのは「彼」である解釈が得られる。これにはさらなる検討が必要であるが、もし被使役者が奪格で示されることがあるにしてもそれは一般的とは言えず、かなり特殊な場合に限られると考えると間違いのないようである。

- 13) ちなみに、Нұрбек Сайраға хат жаздырды. を HPSG 風の記法で記すと次のようになる。



- 14) もちろんここでいう「辞書」記述とは文法における「辞書」の記述という意味であって、いわゆる辞典類の項目の記述のことではない。)

#### 参考文献

Қазақ тілінің грамматикасы. Алматы. 1967.

Қазіргі қазақ тілі. Алматы. 1954.

Қараев, М. Ә. (1993). Қазақ тілі. Ана тілі. Алматы.

Geng Shimin and Li Zengxiang (1985). *HASAKYUJIANZHI*. Beijing.



- Geng Shimin (1989). *XIANDAI HASAKEYU YUFA*. Zhongyang Minzu Xueyuen. Beijing.
- Gunji, Takao (1987). *Japanese Phrase Structure Grammar*. Reidel. Dordrecht.
- Pollard, Carl, and Ivan A. Sag (1987). *Information-Based Syntax and Semantics*, Volume 1 : Fundamentals. CSLI Lecture Notes no. 13. Stanford.
- Pollard, Carl, and Ivan A. Sag (1994). *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. CSLI. Stanford The University of Chicago Press. Chicago and London.
- Shibatani, Masayoshi (1976). Causativation. in M. Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics 5 : Japanese Generative Grammar*. Academic Press. New York.
- 井上和子 (1976). 『変形文法と日本語』. 大修館書店.
- 郡司隆男 (1987). 『自然言語の文法理論』. 産業図書.
- 郡司隆男 (1994). 『自然言語』. 日本評論社.
- 小泉 保 (1994). 『ウラル語統語論』. 大学書林.
- 柴谷方良 (1978). 『日本語の分析』. 大修館書店.
- 柴谷方良 (1984). 「膠着語とは何か」. 鈴木・林 (編) 『研究資料日本語文法 5 助辞編 (一) 助詞』. 明治書院.